

彙報

●學士院受賞者

帝國學士院第一部に於て本年度の恩賜賞の授與者左の如し。

一 近世日本國民史

德富猪一郎

一本朝文粹譯註

柿村重松

●史學研究會

例會 丁抹人 *Tris Johns* 氏の寄贈により今回新たに文學部陳列館に到著したる原大模型の大秦景教流行中國碑が同館正面入口の向つて右側に建立せられたるを機とし六月二十三日午後一時半より文學部第六教室にて本會例會を兼ね、右建立記念講演會を開き、景教碑關係の多數史料をも展觀に供せり。當日來會者百五十名に餘り、例になく會場に溢るゝが如き盛況を呈せり。午後六時散會す。この日の講演要領左の如し。

一、祖先崇拜と我國の封建制度

同寺の沿革を細叙し、次に遺址に就いては其の現狀と礎石の配列をば精密な實測圖に依つて記述するに共に、堂塔の配置や建物の大きさの復原をも試み、後半に從來發見の古瓦を集大成した圖版を載せ、後藤君の形式の分類と銘瓦の解説とが加へられてある。是等の記述はみな詳密で、豊富な圖版を併せ見るに於いて同寺の規模を髣髴し得るに近く、近頃續々創刊せらるゝ各府縣の史蹟調査報告中でまさに推賞に値する一書云ひ得やう。たゞ讀過の際の蜀望の感は圖版の組合せが稍蕪なところ、それに一々の解説が印刷してない爲、本寺の如き多くの礎石や古瓦のある場合、煩瑣な對照の後でなければこの圖がどの遺跡又は古瓦を示してゐるのやら究め難く、特に本冊の如き本文中圖版との對照の部分に比較的誤植の多いの故を以て其の感更に深い。是等は次冊以下に考慮を加へられて完美なものならんことを期待する。(東京府發行、非賣品)〔以上梅原〕

會員 文學士 法學士 牧 健二君

我が國の法律生活を一貫せる原理を討究することは法史上重要な問題なるが穂積陳重博士は其の原理として祖先祭祀を擧げられ、ハーン、グリスピも亦是を我が法律及社會生活の基調として重要視し近世に於いてもなほ此の思想に支配せられ恰も埃及羅馬の狀態に對比すべし爲せる他方に、ルドルフ、シユルツエシタイン、我が福田爲三博士は近世の封建制度と歐洲の警察國家制度に比較せり、然れども此の兩見解は互に補足する事によりて眞を得べく祖先崇拜の思想も近世に於いては上代と其の内容を異にして物質的となり、又封建制度も族制組織に基く所多く、此の點に於いて歐洲の警察國家制度とは本質的に異り云々。

一、漢譯景教典に就きて

會員 文學博士 羽田 亨君

先づ景教の派生したる経路も、東方に傳播せる有様との概略を述べ、景教碑文中の特種の語二三も、碑面記載のシリヤ文の讀み方につきて説明を加へ、ついで本論

に入りて、漢譯の景典は近年佛のペリオ氏に依りて敦煌より發見せられたる景教三位蒙度讚の末に附せる尊經なる一篇にも、景僧景淨の漢譯せるもの三十部として、その經目を掲げ、また景教碑にも景典繙譯の事見ゆれば、その數必しも少きに非りしなるべきに、從來知られたるものは唯此の蒙度讚の一篇なりしを説き、此の間に在りて等しく敦煌より出で、偶然故富岡氏の手に歸したる漢譯の景典一神論が景教流行の遺物として極めて貴重なものなるを述べ、更にこの一神論が聖書の記する所を引用して、基督教理を論述せる、所謂 *catechism* に屬するものなるを説きてその例證を示し、其の行文の漢文の體を得ざるこゝより考へて、未だ漢文に熟せざる景士の譯出する所か、もしくは述作せる所ならんを推し、更に論中の「喩如從此至波斯、亦如從波斯至拂林」云々の文句を引き、此の論の述作が波斯以東の一地に於て成されたるこゝを疑無しとし、進みて本論にサタン (*Satan*) を發多那ミ書きて「喩如胡號名惡鬼」に記せる「胡」の意義、また「處惡中最大號名參怒」に記せる參怒 (*san-tu, san-nu*) を

ソグド語、中期波斯語等にサタンを謂ふ Saman の音譯と見るこゝ等によりて、本論の原本がソグド文なりしなるべきを推し、最後に本論述作の時代を考へ、論中、「所以分明自爾以來彌師訶向天下見也、向五陸身六百四十一年不過已」を記せるを解して、これ基督降誕後その當時に至る迄に、六百四十一年を経たるを言へるに外ならざるべしとして講を了れり。

一、大秦景教流行中國碑に就きて

會員 文學博士 桑原 隲藏君

該碑は羅馬帝領内に起れる耶蘇教の一派ネストル教が支那唐時代に流行したるを記念せむがため、唐の徳宗の建中二年(781)に建設せられたるものにて、碑銘は長安大秦寺の僧景淨(Adam)が撰述に係る。該碑の史的價值は、その建設年代の古くして且つその内容の充實せる點にあり。従つてこれに關する文獻は汗牛充棟も當ならず本日倉卒の際陳列したるものは、モリソン文庫の援助を得て略々その十の八を備へたり。(陳列品目錄參照)

千年以上を経過したる該碑が今日尙破損の少きは、そ

の建立後間もなく(恐らく武宗の會昌五年(845))地中に埋没したるによる。その始めに出土したる年代と場所とに就ては所説一ならず。前者は通説に従へば明の天啓五年(1625)なれど、或はこれより少く早かりしならむかとも思はる。後者は鞏屋縣との説あれど信ぜられず。長安の西郊金勝寺庭内(大秦寺跡)にて發掘せられたりを見るが至當ならむ。この出土景教碑を實見したる最初の耶蘇教徒張賡虞(Paul Tehang)が、その拓本をば當時同じ信徒の有力者なる杭州の住人李之藻(Leon Li)の許に送りしより該碑の名聲頓に擧り、忽ち歐洲に報道せられぬ。陽瑪諾(Emmanuel Diaz)が一六二五年八月二十三日の口附にて羅馬に報告したるをその歐洲に傳へられし嚆矢として、爾來幾多右碑文の繙譯を見たり。景教碑を歐洲に紹介するに最も力ありたるは、(一)親しく長安に赴きその研究に従事したる魯德照(Saunders)の『支那全史』(初版 Madrid, 1641) (I) 一六五〇年ト彌格(Michael Boym)によりて傳へられたる拓本及び新譯に負ふ所多き Kircherus の『支那畫報』(1667)等なるべし。

かくて景教碑の籍甚なる名聲と共に、この一の問題は起れり。景教碑の眞實如何これなり。之をジェスイツト教徒の偽造に疑ふものには Voltaire, Renan, Stanislas Julien, Neumann 等あり。これを眞物なりと辯護するものには Abel Rémusat, Wylie, Pauthier 等あり。されど眞偽は固より問題にあらず。その眞物なりとの證據は容易にこれを列擧し得べし。(一)碑文の字諳唐風なること、(二)その中の記事、『唐會要』四十九の中に見ゆるものミ符節を合するものあること、(三)韋述の『兩京新記』の記事ミ抵觸せざること、(四)Senedo, Diaz 等も知らざりしシリア文字の古體 Estrangelo を記せること、(五)隋唐へかけて回教徒が長安のころを Kund(クン)と呼びしは明初の宣教師が知る所にあらず。しかもこれを Estrangelo にて記せること、(六)碑文に見ゆるミ畧々同時代に波斯僧及烈の名が『冊府元龜』五百四十六に見ゆること、(七)景淨、阿羅本の名は漢譯景教經典の中にも出づること。これらを知悉してこの碑を贗造したりと考へられざる以上、その眞物なるは疑ふべからず。ことに於て貴重なる該景教碑の保

存問題は擡頭せり。

これより先き景教碑の存否ミ眞實ミを驗せざるべからずとの Salisbury の主張に基ける亞米利加東洋協會の決議(1855)は幾多實行難を伴ひしが、數年を経て Williamson と Lees の二人が長安に赴き金勝寺内の該碑を窺睹するに及んで(1866)始めてその本意は達せられぬ。彼等の西安に到れる時現存したる韓泰宰の建てし(1868)碑亭は、Williamson の訪へる際は既に跡形もなくなれり。かくて千餘年を経たる世界稀有の古碑は徒らに風雪雨露の剝蝕に委せむとせり。該碑の保存問題は就中タイムス紙上に賑へり。該碑を英國博物館に移すか、然らずんば支那政府にて保護せしむべしとの手厳しき Stevenson の寄書に動かされてか、在北京外交團は總理衙門に説きて碑亭を作らしめしが(1881)Folke 教授の到りし時は碑亭成りて未だ一年を経過せざりしに早くも見る影なかりきといふ吾が輩が明治四十年(1907)九月二十六日金勝寺を訪ひし時は依然赤裸々の状態にありき。

吾が輩の西安旅行は、景教碑の買收若くは模造の爲め

西安に赴ける大丹國文士、何樂模 (Danish Journalist, Holm) 氏を終始したるが故、往路にては偶然その人の名片に接し、西安滞在中はその人との因縁深き景教碑の移轉を目撃し、歸路にはその人の模造品の運搬せらるゝに出遭へり。金勝寺内に景教碑を見たる最後の外人は Holm 氏に吾が輩にて、碑林中に同じくこれを見出したる最初の外人はまたこの二人を挙げざるべからず。その Holm 氏より贈り來れる景教碑の模型を我が文學部陳列館に建てその記念のため今日この席にまた景教碑に關する講演をなすに遭ふは、如何にも絡れる不思議の縁といふべきなり。

Holm 氏が始めて金勝寺に來りしは吾が輩に先づ三ヶ月餘の六月十日なりき。彼は百五十兩を投じて原碑と同質同大同量の模型を作り、幾多の困難を経て西安より漢口に、漢口より上海に運び、漸く難關を切抜けて更に紐育の博物館に送り、こゝに寄託するに正に九年 (1908—1916)、その間に二萬二千弗にて買手を生じ、その人より羅馬法王 Venodict XV に献上するにこゝなれり。され

ば一九一七年以來は Latran 宮殿に移されてそこに保存せらるゝにこゝなれり。米國にある間 Holm 氏は更に模型を作り、これを英米佛伊等十三ヶ國に配布せり。極東にてはこれにあづかりしもの印度 China に當大學の二ヶ所のみ。今日建立を記念するものは實に該模型の一なりとす。該模型の原碑に比して見劣りするは、下部に龜趺を存せざるによる。されど高野山に建立せられたる不恰好なるものに比しては固より同日の談にあらず。

Holm 氏は原碑の買収に失敗したれど殆ど完全なる模型を造り、支那政府をして外交團の勸告以上に注意せしめ、倉皇としてこれを碑林に移さしめたり。そのためたゞひその背景に有したる歴史的價値を没却せしめたりとはいへ、その保存に深甚の留意を寄せしめたる功は没すべからず。碑林と雖も固より絶対に安全を保し難し。但し支那古碑保存會 (China Monuments Society) が一九〇八年末頃より興起したるは、從來全く古碑なきに對して Vandalism に放任せられたる状態に比し、支那のため將た文化のため喜ぶべし。云々。

なほ當日の陳列品目錄左の如し。

A 掛物

(1)大秦景教流行中國碑原拓本一鋪 (2)唐代長安圖一鋪

B 經典及び之に關係あるもの

(1)敦煌發見景教一神論一卷 (2)同上寫眞 (3)景教三威蒙度讚寫眞 (4)敦煌石室遺書卷二

C 景教に關する唐宋時代の漢籍

(1)唐會要卷四十九阿羅本及び大秦寺に關する記事 (2)冊府元龜卷五百四十六波斯僧及烈に關する記事 (3)資治通鑑卷二百四十八唐武宗會昌五年の條 (4)舊唐書十八上武宗本紀、新唐書卷八武宗本紀 (5)全唐文卷七十六武宗毀佛寺勒僧尼還俗制、同卷七百李德裕賀廢毀諸寺德音表、同卷七百二十七舒元與鄂州重巖寺碑 (6)貞元新定釋教目錄卷十七 (7)兩京新記唐韋述著 (8)長安志卷十北宋宋敏求著 (9)佛祖統記卷四十天寶四載の條、同卷五十四會昌五年の條 (10)唐兩京城坊考清徐松著

D 景教碑に關する歐米人の著書論文

(1) Semed, The History of China. London 1655 [1641] (2)

陽瑪諾(Emmanuel Diaz) 唐景教碑頌正證1641 (3) Thevenot,

Relations de divers voyages curieux, etc. Paris, 1696. Tome II,

P. II, pp. 1-17. [Michael Boym (卜彌格) Briefve relation

de la Chine. 1652] (4) Burioni, Dell' Istoria de la Compagnia

de Gesu. Firenze, 1829 [1663?] Libro Quarto. pp. 10 ff. (5)

Kirchers, China Illustrata, Amst, 1667. p. 12. (6) Renaudot,

Ancient Account of India and China, by tow Mohammedan

Travellers. Tr. fr. the Arab. 1733 (1718), pp. 62 ff. (7)

Visdelou, Monument de la religion chretienne. 1780 (1760)

[D'Herbelot, La Biblioth. Orientale. Tome IV, pp. 164-190]

(8) Abel Rémusat, Melanges asiatiques. Par. 1826. Tome II.

pp.35 ff (9) Klaproth, Tableaux historiques de l'Asie, Par.

1826. pp. 209, 210. (10) Bridgman (辨治文) The Syrian

Monument. 1845. [Chinese Repository. XIV. pp. 201-229].

(11) Neumann, Die erlichtete Inschrift von Si ngun Fu. 1850.

[Zeitschrift d. D. morgen, Gesellschaft, IV. pp. 33-43]

(12) Salisbury, On the Genuineness of the so-called Nestorian

Monument of Singan-fu. 1853 [1852] [Jour. of the Amer. O.

S. Vol. III. pp. 399 ff.] (13) Martin (丁禮良) 天竺胡摩

1854. (14) Wylie, The Nestorian Tablet of Seng-an-fou. Shanghai, 1854-5. (rep. inted in Chinese Researches, Historical, 1897, pp. 24-77) (15) P, uthier, De l'authenticité de l'inscription nestorienne de Si-ngan-fou. Par. 1857. (16) Pauthier, L'inscription syro-chinoise de Si-ngan-fou. Par. 1858.
- (17) Williamson, Journeys in North China. Lond. 1870. Vol. I, p. 381. (18) Legge, The nestorian Monument of Hsian-fu. Lond. 1888. (19) Correspondence, The Preservation of the Nestorian Tablet and Other Ancient Monuments at Si-an-fu. 1890. [J. of the China Branch of the R. A. S. 1889-1890, pp. 136-139] (20) Heller, Das nestorianische Denkmal in Singan-fu. 1885 [Zeit. f. Katholische Theologie, IX, pp. 74-123]
- (21) Henri Havret, La Stele chrétienne de Si-ngan fou. Chang-hai, 1895, 1897, 1902. (22) Holm, The nestorian Monument. Chicago, 1909. (23) Moule, The Christian Monument at Hsian-fu, 1910. [J. of the China B. of the R. A. S. 1910, pp. 76-115]
- (24) Lacouperie, Beginnings of Writing in Central and Eastern Asia. Lond. 1894, pp.84-85) (25) Cordier, Bibliotheca Sinica. Tome II, Par. 1905 1906. Col. 772-781. (26) Huc,

History of Christianity in China, Tartary and Tibet. 1857. Vol. I, pp. 45-82. (27) Gibbins, An Introduction to Moshem, s Authentic Memoirs of the Christian Church in China. 1862, pp. 16 ff.

F 景教碑に關する支那人の著書

- (1) 金石萃編卷百一清王昶著 (2) 來齋金石考略卷下清林侗著 (3) 關中金石記卷四清畢沅撰 (4) 景教碑文紀事攷正清楊榮誌 (5) 無邪堂答問卷二清朱一新著 (6) 海國圖志卷二十六景教碑の條 (7) 辛卯侍行記卷三清陶保廉著 (8) 元史譯文證補卷二十九景教考の條清洪鈞 (9) 瀛環志略卷三清徐繼畲

F 景教碑に關する日本人の著書論文

- (1) 文學博士高楠順一郎氏景淨に關する記事〔英文〕〔Toyoug Paō, 1896〕 (2) 佐伯好郎氏景教碑文研究東京明治四十四年 (3) Seki, The Nestorian Monument in China. Lond. 1916.
- (4) 佐伯好郎氏景教 (5) 文學博士桑原隲藏氏西安府の大秦景教流行中國碑〔藝文第一年第一號明治四十二年〕 (6) 同ネストル教の僧及烈に關する逸事〔藝文大正四年十一月

號 (7)〔近藤守重近藤正齋全集卷三(好書故事卷七十七)〕

(8)〔著者不明方外焚書〕

5 番 外

- (1) Barthold, Zur Geschichte des Christentums in Mittel Asien, 1901. (2) Nan, Les pierres tombées nestorienne, 1913. (3) Yule and Cordier, Cathay and the Way Thither, Lond. 1913-15. (4) Pelliot, Chrétiens d'Asie Centrale et d'Extrême-Orient. [T'oung Pao. 1914 pp. 623 ff.] (5) Cordier, Essai d'une bibliographie des ouvrages publiés en Chine par les Européens. Par. 1883. (6) Parker, Studies in Chinese Religion. Lond. 1910. (7) Thiersant, La catholicisme en Chine. Par. 1877. pp. 59 ff. (8) Rehatsek, Christianity in the Persian Dominions. (9) Giles, Notes on the Nestorian Monuments at Si-ngan-fu. (10) De Guignes, Recherches sur les chrétiens établis a la Chine. (11) Chwolson, Syrisch-nesorianische Grabinschriften aus Semijetschie, 1886. [Mémoires. Ac. Sc. St. Pétersbourg. XXXIV, No. 4.] (12) Holm, The Open Court, Vol. XXX. 1916. pp. 686-694 (13) Holm, The College and International Relations. 1920. (14) 景教碑原大模範詩贈者ネルノス氏小照

二葉 (15) 景教碑文石版摺 (16) 明の王太后より羅馬法王に

送りし國書(寫眞) (17) 明の龐天壽より羅馬法王に送りし

文書(寫眞) (18) ル・コック氏編高昌圖錄所收景教徒人物

風俗畫 (19) 支那古碑保存會徐州に於けるネズナル教の

遺跡 [Journal of the North China Branch of the R. A. S.

1912] (20) Chwolson, D. A., Sirisko-türkiskiya nestorianskiya

Nadgrobnyya nadpisi XIII i XIV Stolieti, naideennyya v Sem-

irechie. [Vostochnyya Zamietki, St.-Pet., 1895, pp. 115-129]

(21) Heller, Dr. J., Beleuchtung d. Bemerkungen Kühnerts

zu meinen Schriften über d. nestorianische Denkmal zu Singan-

fu. [W. Z. K. M., IX, 1895, pp. 321-7] (22) G. de Harlez,

Le prétendu nestorianisme de l'inscription de Si-ngan-fou. [Fé-

shen], 1899. (23) Missions of the Nestorian Christians in

Central and Eastern Asia. (The Missionary Herald, Aug.,

1838) (24) Havret, H., La stèle chrétienne de Si-ngan-fou

quelques notes extraites d'un commentaire inédits. 1897. [Pa-

mphlet] (25) Visdelou, Monument et inscription de Si-gan-

fou. [Annales de philosophie chret., 1836] (26) Walsb.,

Nestorians and the Nestorian Mission in China. 1908. (27)

Bonin, Note sur les anciens chrétiens nestoriens de l'Asie Centrale. [J. A. 1900. pp. 584-592] (28) Lanfer, King-Tsing, the Author of the Nestorian Inscription. [Open Court, Aug. 1911] (29) C. de Harlez, Un ancien symbole chrétien en Mongolie. [Museum sans date] (30) Chavannes, Le Nestorianisme et l'inscription de Kara-balghassum. [J. A. 1897. I, pp. 43-85]

● 讀 史 會

例會 五月二十五日午後六時半より學生集會場にて開催
三浦喜田兩教授、中村講師、江馬、牧、中村、井川、加藤、勝峰、三浦、中原、山本、小橋、徳重、後藤の諸君出席左の講演あり。

一、大夫房覺明

喜田 貞吉君

覺明は本名眞救、南都の學僧にして叡山、黒谷にも居れり、後北陸關東等に流浪し、一たび木曾義仲の右筆となる、其間行家、鎌田正清の女、足利義兼等の爲めに願文を書けり、後慈圓の弟子となり、更に法然につき終に親鸞に從ひて關東にも下り、左右に侍せるが如く、最後

に信濃小諸郡に死すといふ、淨賢は其孫なり、佛法傳來次第記、三教指歸註、朗詠集註の著あり。教行信證の筆者は此人にはあらざるか。云々。

一、太古より王朝末までの美豆良の形式の變遷

江馬 務君

風俗は時代の風潮、文化、爲政者の政策等によりて推移す、ミヅラは男子の髪之處分法にして其の起源は明かならざるも、南洋土人の耳環が變りしものか。これに輪を二つつくるこ一つつくるこの二種ありしが、前者は早く廢れしもの、如し。平安朝末よりは貴顯の男子のみミヅラに結びて、多數の繪畫、植輪の寫眞等によりて結び方の變遷を示さる。

例會 六月二十九日午後六時半より學生集會場にて開催

出席者三浦 天沼兩教授、中村講師、橋川、源、島田、富森、中村、井川の諸氏、勝峰、加藤、佐古、小橋、後藤、山本の諸君、

一、世界の代表的建築

天沼 俊一君
大體をプリントによりて説明せられし後、寫眞數十種

を幻燈に映してエジプト、印度、セイロンの古典的建築より、ゴシック、ルネッサンス、サラセン式の代表建築に及び其特徴を解脫せられ、最後に布哇、馬來、瑞西、南米土人等のカッテイジに就いて説明せらる。

一、井ノ口日吉神社考

中村 直勝君

滋賀縣伊香郡井口鎮座の日吉神社の位置並に傳説を紹介せられ、次に最近の發見に係る社務沙汰氏の文書によりて同社が戰國時代に勢力あり、將軍の特別の信仰ありて社殿華表等の修理も行はれ、社域宏大なりしこと、又其氏子に神子宮人は特種の組合を作りたること、現存せる木像十九體は悉く佛體なるも、其形式手法等より見れば山王二十一社に比して古きものにあらざるかと思はるることより、此地は山王本地の古きものにあらざるかと結ばる。

會 報

●會費領收報告

大正十二年度

藤田 亮策	相田 二郎	小松 倍一	前川喜左衛門
岩田房次郎	井上 通泰	渡邊 轍	井野邊茂雄
清水 博夫	藤本 了泰	井上 琢磨	黒川 眞道
管 貞好	黒井 治徳	木野戸勝隆	松川 武一
禿氏 祐祥	大西 源一	池内 宏	大石 治吉
田中萃一郎	河野 省三	丸山 二郎	岡部 讓
山田 角人	松平 直國	下村三四吉	山本 道雄
清水元太郎	白澤 清人	石川 隆	(内貳圓)
村田 治郎	(壹圓五拾錢)		

大正十三年度

村田 治郎(内壹圓五拾錢)

●寄贈交換圖書

●會員動靜

朝鮮部落調查豫察報告 第一冊

朝鮮總督府

東京府史蹟勝地調查報告書 第一冊

東京府

商業ニ經濟 第四冊

長崎高等商業學校

國民の日本史(飛鳥寧樂時代)

西村 眞次氏

高島秋帆先生紀功碑建設報告

押上 森藏氏

史學雜誌 三四の六・七・八

史 學 會

史 學 二の三

三田史學會

歷史地理 四二の一・二

日本歷史地理學會

人類學雜誌 三八の四・五

東京人類學會

法律及政治 二の六・七

明大 學會

佛教研究 四の二

大谷大學佛教研究會

龍谷大學論叢 二四九・二五〇

龍谷 大學

東洋哲學 三〇の六・七

東洋 大學

國學院雜誌 二九の七・八・九

國學院大學

經濟論叢 一七の一・二・三

京大經濟學會

伊豫史談 三二

伊豫史談會

入 會

宇都宮市宇都宮中學校

石井東海夫

(右紹介者、石川隆)

京都帝國大學文學部國史研究室

後 藤 基 次

(右紹介者德重誠吉)